へ13
3039
5

蟬丸傳記

手月夜話巻之五

江戸　白頭子柳魚編次

第九回　歩欄修羅岐

ふる程ふ其日ハ暮れて。二更の頃ふもあらしふべ。小松がいつも
のごとく。寝る面ふ〜て穴縞ふ蔓の前の閨ふいふ。ふくと
竹ふふふ。北の方い放びて。閨ぬけいでふのび出ふ葉が
部屋ふ来ふ。小松が寐処ふ入りて屏風を引廻し燈火を
そむけ。鋪陳ひきつぎて。ふしいふ。斯とい志らば保則ふ
い旅夜小松ふ戯れ〜ふ。渠ハ情ぬ含んで左右の袂ぬ
せざり〜ふ。いまゞ年ものざれが恥ちひふるあふんが今宵

へ13
3039
5
特

推く園(忍び)が渠おどて深く固辭屋とと頓てち穴
紙を立いでさせるい落葉が部屋ととどうゆふ平素
ふい案内も知れる吾家の天井高くといつど脊を
ぬ。根板厚くといつども荒くふゆるど辛ふくて落葉が部
屋の掘ったどくて裡面の動静を物色適怪くむべく庭
前の木の穴より幌をかて深く面を色くゆくげる漢
児蹴くと出て四下を見まとくつ。頓てこあと来る形勢に
保則郷いとい不審盗賊ふゆ。と思ひくど二足三足ちう
ぞさて戸口ふ身をせうどふと。知ふねが徐く曲者い縁
の上ふ這上ふ落葉が部屋の戸を引あけ難おくうちる忍

ひ入りぬ。保則郷いよく怪くねを足をつく彼部屋の戸口
ふたどど細ゆふ戸を引あけて裡面をんゆるふ燈籠皆
ふくて治定とい見つねど。彼曲者い奥の穴ふとくこ。小
松が部くてあるんと思くを屏風の内ふ入体ふ。保則郷い
活と焦躁。扨い這奴とそ小松が密夫ふて。今宵高葉が
宿直を幸ひ忍び来くゆのあるんと裏く自を推ち
づめあをを戸口ふ耳をふくあてゆメが男の奥音ふて。千
辛万苦くて忍び来ひの。おどて今宵ふるどて。
衣引のつぎ物おのとゆそねい奈何ぞや。心ふもゆぬふ
ものあるあど云といいをあひしゆいねぞや。おどうち郎つ為

体ふ。従来一徹短慮なる保則卿。勃然として大ひふ奴心
り憎さ女郎めが動止るを不義淫奔い堅き家の掟なるを。
隠男共拵へ我欲とも忘れ引いてこそ肝太く耳注
斬る支あるうへ。我慾ゆ就ふ。都ふ生れ此身が面
の賤の女ふ恥辱共与へられて。其侭ふ捨置がと。花
心おけれが流水ゆ又情なし。忍い恋せくくれんだと。
ふ飛いり用捨もなく扉風引のけ夜荒く。淫婦好夫
動くなといられて男い慌忙き延んとする共。おどりくく
抜歩ふ發矢と斬が若と呼び二ツふ裂く仆伏とされて
驚き起上る共返とカふ躓より売竹割ふ砕さげるる。此

物音ふ駭きて宿直の武士カおつとり捕息子共提く各反
馳来りとんれがあるぐ保則卿血刀さげて立ふふ近習い
それと心ゆく。懐紙ふて徐ふカの血共おいのごべ保則つい
白双共おさめ大息つきく宜ふ。吾今宵寝られぬ。
ふ何とぬ人身騒ぎくて居きふ肉動くな。拵おそあふ
と汝等ふゆ居ぶさぐ。獨り寝処をいでく此部屋の辺ふ来
く。窺ふとゆ居ぶそれある曲者。葉ゆ部屋ふ及忍ひこ
む也。扨い此部屋ふ寄食とする小松とゆうんが密夫あり
事共推く。家の掟を破るの輩。憎さゆ憎くと以後の見
せくめ。手ようけて二人とゆ陽府の暇共とぶくくく。

何者あるや其奴が死骸疾改めよと宣ふに宿直の面々
よりてこれをば知らぬ賤の若者とあざけれどこれ奈何
朱に染て伏しぬふに寒さ夢の前宿直の武士い憚
目うと熟視れども北の方に逃かくれが再び駭き
主人に對ひ吾君是を離ぜ小松にあらでこれ是小の方
みて待るるしるといとれて始て心つき瞳を定めてよくこれが
案に違ひて夢の前これ夢にあらざるかと保則卿も
直と呆れ少刻辭令有て眉を顰め倩綽の
心あんどるに彼小松に此御の村長とあらんが小姐にして落
兼て親族なるよしい吾も粗これを聞依てふその男い

渠が家に在しを日の密夫にて痴情にひられ此処までも忍ひ
来りし者からんと何の為に夢い又小松と刎房をつくる
やらんと以ての外ぐしの落葉と小松と鞠問せば其
詳なる事なるべしとて這奴等をねく来るべしと命
ずるに宿直の武士い阿と應て立去りしが頃史はして
西人を誘ひ来る落葉いいつの所に詰居りしとて小
松い何方にも居らざ漸に北の方のち国にふられ居りし
尋出して引立来りしと言上に保則卿いまず落葉に對い
有りし次第を告ひ扨小松に壯佞の死戸をさしてこれ
汝渠を見識わるやと問ひ小松い大く駭けども包

むふよ〜ゐく。初め若枝とゆく〜〜ひて直太良が許え艶文を贈りしるよ〜〜て。昨夜夢の前の仰ゐ固辭ぐ〜〜と房をうく〜る。一五一十白状ゐ及ひられば保則つい漸く疑念をることいつどル詮方ゐく。敦心中ゐ思ひるふ。夢ハ吾剃妻ゐがら高藤公のち娘ゐ〜て國母の妹姫ゐう。さて其世の遇ルゐ。さゐ手ゐうけられば奈何ゐるち咎ゐ蒙らんもしゐ難し。吾家の字沈口い此一挙ゐあ。とく。さゐ左さゐ思ひめ〜〜ておつせ〜〜が再び宿直の武士ゐ對ひ最前ゐう縛ゐまぐれて忘れ〜〜。高兼ぐめ〜〜つ〜ひの若枝とゆふこそゆとうゐね罪人ゐれとくねく来ゐとのことゆふゐ宿直の

武士們い矛女細領兼〜て。鈸のくゐぐ探〜見むちといつどル。若枝い此騒動の起りしそぐゐち。疾迅うせ〜〜と思〜〜く。何方ゐル君らぐ東西とるうち東ルゐふ〜夜ルゐのぐと明渡ゐふ保則郷ルいよく気ゐ付いふち這奴を遠く走ら〜て家の大ゐのゐれ。もゆく四方へ部類〜て駿兵ゐ付つゐ。捕ちつことと嚴〜く下知を信〜ゐ。上ゐ下つと拘擇ちる打ゐ気傳致忙〜く走り来て廊下ゐ踏躓く頭ゐさゐ。ゐ今太上皇帝よりのち内勅と〜て。橘の良利郷ち入りゐつゆゆよりルゐ保則郷い勅然と色ゐ変ぐ。冷ゆ汗流〜て顔見合せ物そいつどゐ猶豫ね

保則卿
つのゆきりて
夔の前髪
斬る

第拾回　太上皇賽使

當下保則郷ハ院使ヒ下向あるよ〳〵ゑ〻く。群臣と顧て日外。泰山高藤郷の年賀の佳儀ゑ祝さんと黄金三千両を許与の賤宝を添て洛ヲ登〳〵る花舎菰見ゆル最早今鳥欲羽豆日ハ飯つ〻来べきと比あるヲ其便宜ハおくて不憶今日の院使ハ最不審加旃橋の良利郷とあらん其名を頗ゆ〻られどいまゞ面ゑあらん〳〵る事あ〻れど伺ハ左ルあれ。内勅とあるうへハ躬を清め衣服ゑ改めち出迎ヒ奉らん。然あれ昨夜よりの一条ハ努秘〳〵て漏らとりあ〻れ。倘夢ゑ綽ゑ問ひとせあふるあ〻ハ嘗沉病ヲて参ル〳〵。

と披露せん。両個ゑ亡骸を深く隠そべ〻と命じぬ。頃て支度とゝのつて客廳ヲ出迎ふ程ハあらせず。廊下ゑ警蹕の姿ヲ〻ろとゝ〻ヲ徐くある持の朝臣良利郷。衣冠正〻ゑ優美の次女保則郷ヲ會釈〻て賓客席ヲ着ゑ〻。後ヲ従ふ揖若丸ハ太刀帛紗ヲ持そ〻ろ。其他雑掌。岩桐右中。同苗左中。威儀堂〻と歩あり主の後方ヲ居流〻り。鈹の東道主保則郷。遠未座ヲ頭ゑさげ。思ひ〻げ〻ゑ〻ち入りあ〻る。衾裏ヲそ〻くみて無礼段ハいく〻ヲ。嘗ハ敕を蒙〻てた内勅の趣疾伺ゑ下されう〻と。最謹て演舌れハ良利巡筋〻ヲて。太上皇より内勅の主意餘の義ヲあらん先

ねんちんじゅふ　ぜうぐんおの　こるうぜ
年鎮守府将軍小野春風と倡ふ夷賊退治の大功あるふ
よりて富國の守護職ふ任じゆふ耶ふ近比ふ賞四討正しう
らぶ民ふ虚げ憍奢ふ誇り剩へ酒ふ溺れ色ふ荒ぶ国毋
のち妹しる蔓の前を一室ふ推籠義貞女とさへいえど人の
妻女児の差別なく奪えて小妻とあてよう。又いわう十日
わ泰山しる高藤公の耳順の歩ふして諸國の守護目代より
萬般の贈物くもふ保則偖ふあらぶら使者をもつ
うわさでるる野心ふさしもふ拙まれりとのち疑い此
二條のち不審の義ふつき言釋あらぶ章勅答ふ及ぶれよ。
と申より保則ふさげ。うえ思ひりうけぬち内勅ふ崇い

あるうふ謂しる高藤卿の年賀の佳義ふ祝さんとて家
と。たるふらしるうしるうしるうつきんぶ
隷花倉高四良並見理金太の両個ふ分付黄金三千両ふ巻
ぎんしちくく
絹太刀種くのもの物添てつらかせしが最早今日翌ふ返う
来べたけるべしと思ふふ違ひて都へ使者ふりしるら民其
故ふもて野心ふどるふ沿うるるき根ふるる又民ふ虚
憍を拉ぬ人の妻女児ふ掠奪して傍室とするるんどる。
是又下官ふ対ふそうて一点ぞうふ覚へいちぶよく思ひて
ふ人ふうう。保則四十をふるこがてあるふ伝の条ふ色ふ貪るべ
き吾妻あぐふ蔓のもの高茂公のち愛女ふして。則國
毋の妹なれがなどて味畧ふ各ふいうとべき私なぐふ此程より

病着ふて枕もあがらず。左やせん右やと日夜心外なやまし侍
うぶ思ひうけなき是ふのち不審八百萬の神こも照覧あ
れ保則ぶ才ふとりて。一点いさゝか疑ひ立て此
よ〳〵ぶよ。まふ養問とげらるべ〳〵と実〳〵ゆゑふ相述るふ良
利首を左右ふ手揺り。否く其勅答甚朦〳〵。保定三千
金を齎〳〵て。都へ登さぶ疾彼処つも至るべきふ黄金ふ出
過ら毛一疋今ふもつて都へ来らど。然ふいへそれふ違ふど
ぶいよ〳〵洛へ送り〳〵てふ證據あらんはそれはん又保四千を
ゐ〳〵る〳〵以く色を令貪ぶと口怜悧いひあはとこも飲食男
女ふ人の大慾とふ存ぶ。聖人も宣ひしふゆゑ〳〵てやはて

保ぶごとも愚昧のふ人ふ〳〵や不惑ふ越ふとも色情ふ
ふれんこと難ふ束ふ〳〵と嘲笑へ。保則郷頭ふもとげて院
使ふ對ひて言あらん良利ぬ。黍くも先朝の勅命ふ依
く奥羽の兵を率〳〵。はも勅力ひ猛ふ恐〳〵。熊平荒
夜双ぶ一族を退治〳〵る此保則ふ愚昧とふ古長〳〵今
一言いうぶ勅使とて用捨ふ。ぶ敦園荒く言ふ良
利騒る形執力もふく。盗人猛く〳〵ふ保ふをやふべき
ふ左程武ふ男の其許ふ。何ぞや諸國の強賊ふ
家臣ふ奥加の旅高客ふ手扮セ多くの黄金ふ
ど。臆病未練ふ保ぶ家臣ふ曽路ふ名ふ残ふて朝の

罷と消うせて。金銀珠玉ハ盗賊ふ奪ことれとされバ俟さうと
ハ。既り来べき時あらんや。それとハ知らぬ虚気的愚昧
いひしらるる秋と始くゆて駭く保則。扨い花倉亜見[illegible]
奴奪ことれ。命をハうしなひいるるよと列座臣下共侶ふ直と
呆れて返咎おく。黙然ことしていふふ良利ことこと疾
視ていうふ保刈をれのこめらど。局葉ら部屋児なる
小松ふ恋慕し閨ふ忍びて嫉妬ふ敢絶ど過く夢のあと
手ふうけら。狼狽者の保則殿良利いふふしてこれを云
れうといふふ最前爰て来る道ふて。向ふより来る怪し
き女。容子あらんと曳捕て糺明をれば局落葉ら

つのいろく若枝とゆらんいふ者とら。為其子細攻問ふふ。
初小松直太良と密合せしるよりして。今宵小松と
蔓の前が卜房をうて撃れしふど一五一十。床の下ら
隠れて凍が吟しは。[illegible]の吐実ふて縛の顛末詳ふ知れり。
誰有敢其縲紲哉若心立来よ。と言下ふ阿のと飛て若枝
どば高手小手ふ縛く白洲へこそ引居ら。當下良利
夢あらばゆれ保則外戚ら高爰公の息女ら
蔓の前をもみうけしふ。反逆謀叛ふこれ同じ反ふ
らが言ゆん威猛高ふ罵ら言ふ保則郷ハ戦慄向ら
青くあ。又赤くく更ふ一言手句ハいでど。良利再び安

高く。大罷人の保則あれが都へ引く音に別条音ふき
き奴あれど。此良利が好意に以て此場ふおいて死
ふ。誰白痴ふ双とと〳〵せ。といふうちゆく良利郷の後
ふ付り揖若丸白木造りの小四方ふ自屠刀とうちふ
せて目八分ふさくげいで。保則郷のあふ置が莚ふ連る臣
下の高く伺といふべき辯ふく。逆ふ顔に見合せて主の最
期ふ疎忽より無越罷に成ふ〳〵されがそに説破んより
ふふく。口を鉗く扣て〳〵。保則今い詮方ふく肌ふ〳〵く
つろげ三宝とうあげ。後の方へらいゆりて刀逆手ふとりあと
〳〵。出ゆんきや。花舎莊見们あへふく討れ。くゆく〳〵と
聘物迫次盗賊ふんどふ奪れんとふ。夫のあらぶ過く吾婦
妻蔓の前に手ふうけ〳〵支迫明白ふ顕れ〳〵うへ陳
どうふよ〳〵ふふ〳〵我家ちる時節来れ。ち勅使ふ〳〵ち
見届下さるべ〳〵とふよりそゆく左手の脇腋へ〳〵突立
右手の方へ引廻せば。良利荒ふと手ふぐふ。然ルそふづふ
有うふん。汝ふいづるあり汝ふ返る保則ぐ自屠神妙ふ者
ち。籍の品類封印つけよ。と詞の下より山右桐左中。同右中彼
方此方へ欠るぐり。保則ぐが年来吝ふ〳〵て積貯へ〳〵巨萬の
財宝宝庫いふふ更ふ家のうちふあるとある。唐櫃三
手ふ呂の類悉く錠に成ふ〳〵ろ〳〵て封印つけ。家臣们ふ去對

良利々太上皇の勅を傳つゝ保則々怠りなく嘖む
勅使
良利々
保則々

汝等ハ佶と罷科ふ而せらへさ命れど。そハ追ての沙汰
ふ及ざん。小松若枝の両個ハそれ迫汝等寺ふ飛るべかハ
東ハおれ。ゆゑ此よ〳〵立ちて太上帝ふ内奏し。其後天
機みまうせあんらさねてち沙汰のあるまでハ佶慎ミ出るべに
と最厳重ふ分付て。依くこと〳〵て従者めし〳〵つれ良利て
ハうてゆゑひね。斯りなれハ。保則ハ家臣なれ夢裡ふ又夢
ハ為を心地ふし〳〵て。更ふ其ハ是非ハ。ゆゑ保則ハ数年此
国ハ領し。家富財豊ふ〳〵といへど。仁義ふ疎く。賢ハ茶。
士ハ招くの志ふをもめらふ頗る武伎あるものとハ。並見
花倉ハ如く。自其ハ勇ハ湯ハ〳〵思意落く。憍暴ふして利
欲ふふけ。輩のミ多ゆるものふ。此場ふいとうてハ尚忠節
の志ハいぶく者ふく。主の最期ハ余伝ふ入て阿容〳〵勅
使とハ飯せ〳〵ものあらん。従来保則いまハ世紙とてハふ
く。妹ふ千里姫と。ゆへ〳〵ハ御尚ふ保則と倶ふ奥刀の夷賊
ハ平ハ鎮守府の将軍ふ任ぜられし。小野の春風ハ妻ふ
うるる春風いちや先年逝去。梅樹丸といふ忘紀念の和子
ハ樂〳〵ミふいすと盛の年ふなハ野干王の黒髪を。おし
きり尼とかく。同風尼と法号し。阿武隈川の過ぐるる
別業ふ引ハ籠り。鈷の繹をハ家長諫山清記忠節とい
つる者ふ去任し。其ハ命仏三昧ふて暮せ〳〵ハ保則ハ

方より此度の立信を報ぐるふぜ。同風尼ハ斯と聞くと一度
驚き一さびい愁ひ頭く出羽の國ふ赴き泣くゝぶ保則夢入
前ぐ亡骸をぶ假ふ埋葬め。又小松若枝名い女かぐらル一
さなふぬ罪人ふれば繋く獄ふ繋ぶ。去のびゆるふ仏支を
執行ひ。奈伊ふ名ち名めや来ろと安心ルなく候かどふ。
凡一ヶ固月余を経ゝ。一日中納言高藤公より花房十郎
智英といふ者使者として入り来ろるふ。同風尼ハぐめ
上下まぐ負歩裏きて出迎へ一室え招ぐいるふ十郎然
氣ふれ面色ふて寒く暖ル述終く扱いぶく。此度主人高
藤六十初度の賀ル祝ぐるルめて諸國の守護日代

それゝの贈物せぶるぐふるふ。當鈹保則郷い親昏君ふ
出ゝゝふぐら。奈伊ふ名ち心ふやち使者ル登らど。又贈れ
ルふゝ。高藤公い大圭ぐ名ひ。嚴ゝ其怠ぐの罪ル責問
んとのさもふふ。北の方萬殺とつくろひて私ふ吾侍をつ
ゝゝて其い故ル問せるふく苦くふぐどい保刈つ。夢の
前ふ謁ゝ奉ぐ。親その子細ル問まれゝ。此ふ披露ふ
てゆいるべゝ。とゆより同風尼始め群臣廉月一く眉と
顰め。こい心ねねち誕使のぐるふ包をつべき支ふねど白
地ふゆ述ぐ鬱ふ高藤公の名ち許ゝ三千金ル療問ぐゝて花
倉高四郎蓋見理金太といふ両人の者ルいこせゝぐ。其

使もいまゞ飯らざるさたふ。云云の珍叉いできて。飯い上に下つと騒動をるゆゑ。院の内勅として橋の良利郷といつる人来りゆゑ。箇様くの叉よりて。兄保則ル言釋おく。其場にて自屠くて相果つそれも一つふ妾楽門あぐら妾ふ来りゆゑ。假令兄妹の亡骸に埋葬く都よりの音信を俟処くと縛の顛末に告るゆゑ。花房十郎ハ大ひふ駭をとゝ意外の珍叉に少もの哉。尤先帝太上皇の号に返し。橋の良利一人供奉く奉りて。諸國の名山霊跡にめぐりゆふよく〳〵あれど奈何ぞ良利一人ら従者に引俱し。縦内勅なれがとて天聽ふル達せど

〳〵て。當家へ来らんいつられゆ。思ふ其い奴い先年亡せるゆ。賊熊子们ゆ残黨ふ〳〵て良利郷と偽り密ふ仇に〳〵せ〳〵ゆめゆらんゆ。倩縛の拐を案ずるふ當家より贈り彼三千金を途中ふて掠えり盗賊ル則這奴ゆ業あるべく。何ふルせよ怪〳〵きい這奴ゆ封印と附く飯り。宝藏唐櫃手箱の類こそ心ねね苦〳〵疾ひらたんふと十郎ゆ下知ふゆ保則ゆ家臣ホい勿心行の封印に押切くあらさむるふこい奈何宝庫積貯〳〵黄白唐櫃手箱ふ入金〳〵珍賞奇物悉〳〵亡く更ホ一物ル〳〵てふゆ〳〵同風尼ちゆ渾家の者無明の

睡り始て、さゆて原来良利と名告く来りて全く杜騙
ゴてありるらと悔の八千ゑび百ゑび臍を噛といへども
今更詮術なく。こゝ奈何せんと再び周章狼狽をれど。
これぞといふ手ぐりもなく。智英其いと紀次刻あんず。
此賊いこれ並くの者ふあるべうふ早速洛へ立歸り。高藤
公ふ言上ふし。撿非違使ふ分付て。踪跡を探し。急ふ誅
伐を加へどんば。後ゆゑ大ふなるべ。と家人のうちふ
重とゝめる者を撰出して。彼良利と名告く来りし
者の骨相圖を數十枚ら写しいざさゝられ携へ
頓ふ洛へ引返して急ぎぬひぬ斯く保則郷の皷ふい

同風尼がもゝひとゝて。小松若枝名い女なぐらんもくゝ
き罪人あれバとて終ふ首を落葉ふいち暇を給へ
ら。又小松が親庄司直太良が親竹右門名いその子供が
いよゝあさ罪を犯くゝられど。子の罪を以く親ふをよゝ
さぞとの本文ふあらい家戝を没収し。國境より追放
ねとぞ。落葉外ゑ庄司們が支此下同ふ話説ふ。叔
同風尼い保則ぶ皷をびゆぶ家長名ふ固くゆゝし其ゑ
い元の阿武隈川の庵ふ立返り。兄姉が菩提の為ふとて
慈悲善根を專らとは。厚く後世を吊ひぬ這條狀
能最多くれど。赤女曲ふ写さびあらく。あらん看官宜く

想像ぞ〳〵却説花房十良智英い夜を中て日ふつゞ洛
ふ馳飯りあり次第に殘り多く夢つあげ彼骨相図を
とてやうくれが高藤公ち夫婦い大〻とあゝぞ歩駭せ
ぬい哀悼ち涙ぜさあ〳〵と頓く云云のよ〳〵奏問ふ及び
ぬいれが月郷雲客斯と夢よりとれ容易のあふあ
ぶと諸郷ち徐茅のう〳〵撿非違使の宮ふ行せて彼骨相
圖に許多うつさしめ諸国〳〵倘此人相ふ似ること者
あるが頓ふ訝〳〵いでよと囑託を以く觸知ら〳〵紙ら詮美
紫〳〵といつどゞ更ふ喧喧ハ忘れざりゝと扱ル蟬丸ハ目
〻と橘の良利と偽り保則ふ誥腹をふせ又ぶ恨の手に
散じ若干の黄金に掠ゝり暫〳〵ぶあいぶ奥羽の山中す
分に行ひそめ江湖上の風説を窺ふ此ゆえやくル都一夢
〳〵國くえ骨相書配符に以く詮美きび〳〵と夢〳〵れば一日
完生兄弟揖若其ハ他一味の輩をつどい各ふ許多の黄
白に行ひろちあと〳〵扱いつ〳〵く吾い今より只一人尚殘の國
く行巡り一味の事をゆねらんと思つぶ汝等い又那里ル
分を潜め時の至る行待べし〳〵吾倘いよ〳〵旗をあぐる時
節倒来せば配符をゆるく汝等とまねらんふ其時い
速ふ馳聚るべし〳〵先それまでハ吾倚一人ふて縛〳〵
んとて琵琶を袱包ふあし〳〵て脊負ひ西刀に横と〳〵麓

蟬丸
岩投山ゐ
老翁を
いぶうる
蟬丸

笠ぬ深くふ〜て諸人ふ別を告隠家を立出くもゐくて
山岩提山ふさ〜くうりね此山ハ陸奥一の高山ふ〜て岩石
峨くと従耳一更ふ世外の思ひ為をせり蝉丸ハ名を山深く
ひとり登るふ口ふれが一むら茂る木次のうちふ細く許ある
禿倉あり軒端似き椽朽て空〜く狐兎の栖家と荒
果てうち仰くゐるふ一箇の扁額ふ山神廟とハふ三字と
記〜〜うれどそれとふ幾年ぬ経うと思〜く風雨ふ晒
されく迷ふ讀り蝉丸い暫く此禿倉の椽ふ凭りけて遠
近をながめいさりしがそや夕陽西ふ似き鈴璃〜る山色
暮雲の横り光景ゆいうれぬるふ若今霄ハうふ一夜ぬ

あらとべ〜と頻く裡面ふ入て座ぬ上熟思ひめぐまふ
今霄ハうきうりゆ〜敦実卿の忌日の逮夜ふ當りうれが
蝉丸再び心中ふ思ひちくかく無ぬ忍ぶ歩といひ旅路の事
なれが仏ゆ作善い心ふまうせどと責くち記念の琵琶ふ
うとも撫持拙き一曲を手向まひふせん平素ふ慣りの笑
の戸あれど斯る迷僻の地ゆれが伺ふ〜〜うべと袂包
ぬひらた玄上をとりいど〜〜妙手を尽〜〜て秘曲と奏〜
終く〜頻く念仏数返ぬ唱え琵琶を素のごとく撫ふ
めぬ左右ちるうちふ月ハ夜ル深くと更ふとく獣の吼ふ
谺ふひびきふ物凄きるいうんうとふ〜といつぐル従来うる

処ふかの馴くる蟬丸あれが縛とるせど漸く眠ふつさしが。
不測や拙のゆとふ一個の美女あらとれいで潛然いとふ
くふ蟬丸が夢のうちは駭さて熟其形相を視るふ
ふこれ月宮殿の常徴ふあらぶる貝闕の乙姫ふてるゆく
ゆとべき粧ひあれど悼くいふ全身此処彼処涯つけ
られくとくく鮮血こんくくとあくくてさる苦くげ
ある面色あるふ蟬丸が彼美人ふ對ひ抑你が何者の人
よくて小夜更くく妾ふ来りるふやといふる彼女らふ
妾が素性の園生ふつうつまひぶくそれより後乎素ふ你
が傍を去らば深く窮恥をふむくく身の不図さ今

雨此山中ふ栖る変化妾を捕へ逐さの視るもふく樹影
悒瓜代わて斯の如く妾が全身ぶりそべるふ君疾
く妾を救ひ給いれくと言ふくまくと潛くと泣くと忍へ
び在り涙妾が消失て帝堀くさる松風のそぞ殘りぬ蟬丸が
始く心づき四下をうんぬせば此れ南柯の一夢ふてあり々とが愕
然とくて駭き扨が今のが夢ふ夫夢が立臓
の労七情の鬱さるふよりてふをものおれが大くさ
旬月中ふ思ふゆ代ふるものく故ふ聖人ふ吾夢ふ問
公を見ぞと宣ふ拙るふ吾今竟ふ人くくる支ゆるこ美
婦人を夢ふるこそんなねと古拙左拙思ひめぐらしが。

夢の中に彼美人が其昔牛の園生につゝ後又吾宅に
来蒙りしよ〳〵来いつるを以て考れば。りく〳〵に霄に吾
弾ぜ〳〵親皇のち紀念にとまつり〳〵。玄上の精夢にあ安
をあふい〳〵るにあいあふぬる。最心元なし。と慌〳〵袱包
来ひらきてみるに案に違つゝ琵琶に矢く跡形ふ
〳〵。蟬丸いこれをみるくこゝに口惜〳〵や。悪時目眠〳〵うち
ふ。大坊なる琵琶を奪つられることを易うらねいで郷里
迫ふ探〳〵出〳〵て其変化を退治し。琵琶を取とり〳〵
さでい立べらぶと力を立て立上ちんとする打ち。一個の
老翁忽然とあらつられいで。飄〳〵としてあゆ来る。

蟬丸が前に踊躍ふ。蟬丸これを見るより眼を怒らし。
汝一の妖精ふ〳〵て。吾大坊の琵琶を盗み去りしや。疾
出さどが目に物みせんと。敵圍あふく罵て。既に刀の柄
に手をかけて接んとする。執力に彼老翁に逡巡して成
をちぶ豪傑姑く俟べき事あり。吾全く妖怪変
化の類に〳〵て你が石拉〳〵ぬる琵琶をとりかくしる者
ふあらば。吾に此石の山の神ぬ〳〵て此禿倉の主〳〵ぬる
る去る頃より。此山奥に一人の変化来りて住り。其眷族
夥〳〵くをて吾彼と敵〳〵ぶるく。是非なく其部下に屬
〳〵。渠がとめふ役せらるゝと口惜〳〵とい〳〵どる詮方なく。

無念の年月を送れり。今霄君の琵琶をとり隠しなる者に彼変化く願くは豪傑とがとめふ彼変化を退治くてむるべくと涙をぐふ憑む為体全く歎くとも云へざるれが老翁羽ふ對て奈何のみも汝が言処は違ざれ吾其変化を亡くて琵琶をとりうへ後の愁を除べし。而其変化に何処に住居ゝ如何る通力やあると問ふ。老翁答て此山奥数十町ふ一軒の古寺あり。変化に這寺ふ住居をるが由ふ。避迫彼処ふ撥ぶ者に忽仍方をれど。妻を以く撫者牧童ふ口ふ彼処をび魔刑とをかく竟ふ仍ど。故ふ変化いよく時を切る。次ふ拉び樂むく努倦く不

え堪をとりなふ。あと最懇ふ悟くて次女に消うせぬ。左右をるうちふ早山の端ふ出ら渡りく夜ふ明をふるる。蟬丸に意のうちふ山の神をふ斯思る程の変化ふれば定めて其神通廣大ならん。遽莫いる程のるやあふんと鉤の準備ふど。路ふき山又山ふ分けいり。葛蔓ふそつ辺て峯ふよぢ。木の根岩角ふ倦て谷ふくぐり。そこをとなく探くて見るふ日ふ西ふ春くて。猶月をあうふ。ふとり仍ふ向ふの方ふ崩れ〻くし山門とおぐくて紅のあり。扨いそと狂奥ふ。ふく進入るふ伊のやん散動めを笑ふ。蟬丸に是穴九めて

変化ならんと物陰より窺ひ潜く裡面の動静を物色ぬ
早竟奈何なる妖怪ふして蟬丸これを退治ちるみる
や否嗣編發見の報ぜ候得く知るべし

蟬丸傳記　芋月夜話巻之五　大尾

東武作者　白頭子柳魚

浄書　武江　高井洪斎

同　畫者　岳亭丘山

書林

京都寺町通佛光寺　河内屋藤四郎
江戸日本橋通壹丁目　須原屋茂兵衛
同　貳丁目　山城屋佐兵衛
同　貳丁目　須原屋新兵衛
同本石町十軒店　英　大助
同浅草芽町貳丁目　須原屋伊八
同芝神明前　岡田屋嘉七
大阪心齋橋通博労町角　河内屋茂兵衛
同心齋橋通本町角　河内屋藤兵衛

飯島三省